

身近なさまざまな障害と かかわり、わかりあう。

読者のみなさんから「発達障害について教えて」「自閉症を知りたい」というご意見を毎月多くいただきます。

発達障害といわれる子どもたちは1クラスに2、3人は必ずいるといわれ、家庭、学校のみならず社会全体としてのケアが求められているのが現状です。

今回、まぼろしでは発達障害学を研究する野口和人先生を訪ねました。子育て世代の私たちが知っておくべき大切なお話です。

宮城教育大学
野口 和人 先生



特別支援教育総合研究センター教授。専門は発達障害学(心理)。発達障害児の学校生活・社会生活支援、自己理解を主な研究テーマとしている。

【 大事なことは学びのプロセスと環境 】

—まず、野口先生の研究内容についてお聞きします。

「最近何の研究してるんですか」と聞かれると、「子ども達と遊んでいます」と答えています。何を狙っているかという、障害のある子どもたちの「自律」です。自ら立つ「自立」ではなく、自らを律する「自律」です。かたいイメージを持つかもしれませんが、例えば私達でも、疲れたときに友達と遊びに行くなどして自分の気持ちをコントロールしますよね。そういったことも含めて、いかに自分をいい状態に保っていくか、というサポート方法を研究しています。

学習面も同じで、どうすれば自分なりに理解しやすくなるのか、自分でできるようになるのか、こちら側もサポートしながら自分で発見していく。友達関係でも、自分達だけではなかなかつくっていくことができない子どもが多いので、そういう場を提供したり、私達がかわって友達づくりの支援をしています。

—具体的にはどのような方法をとられるのですか。

例えば知的障害の方のサッカーチーム。私はいま、そのチームの監督をしているんですが、中学生から38歳くらいまでのメンバーがいて、毎週土曜日に活動しています。また、鉄道が好きな子どもが多いものから、毎週集まって話をしたり、みんなで出かけたりしています。

大学と同じ敷地内にある附属特別支援学校の子ども達に、大学の施設を使って普段なかなか体験できないことを行っています。子ども達

は学校に来れば友達と関わったりするのですが、学校を離れると友達と誘い合ってどこかに行くということがないですね。自分が高校生のときは友達と連れ立ってあちこち遊んで歩いたのに、それがまったくないというのが不思議な感じがして、なんとかしたいという想いがありました。学校とは別の場所で友達とかかわる機会をつくり、それをきっかけにして友達同士でどこかへ行けるようになればいいなと思ってこれらの取り組みを始めました。

—そもそも発達障害というのは、どういった症状をさすのですか。

実は発達障害でひとつの障害ではなく、トータルな言い方なんです。その中には自閉症スペクトラムやADHD(注意欠陥多動性障害)、LD(学習障害)、その他にもありますが、それらを全部含んだ総称が「発達障害」。

その症状は、個別の障害によって症状が違いますし、人によっても相当開きがある。年齢によっても状況が変わってきます。

簡単にいうと、自分のことを表現する、思いや願い、考えを表現するのがとても苦手な子ども達のこと。例えば自閉症という引きこもってなかなか人との関係性をもてないというイメージがあると思いますが、実は子どもたちは人と仲良くなりたいという子が非常に多い。でもそういう思いとは裏腹な行動をとる。けなしたり気を引く行動をしたり、一緒に遊びたいのに叩いてみたり。小さい頃はそれでもいいかもしれませんが、小学・中学・高校では、まわりか

ら「エッ!」と思われてしまいますよね。ADHDなら衝動をうまく抑えられなくて、暴れまわったり動き回ったりします。純粋な学習障害であれば、漢字の読み書きだけ全然できないという子もいます。口で話してあげれば全部理解できるのですが、テストで問題文を読んで答えを書くのは全然だめ。映画俳優のトム・クルーズも実は学習障害であるといわれていて、台本が読めない、人に読んでもらって理解していたと聞いたことがあります。

—治療や教育について何が問題で、何が重要なのでしょうか。

「治療」というと基本的に“それを直す”という意味だと思うんですが、発達障害に関しては「治療」ということではないのかなと思っています。もちろん、症状を抑えるための薬や、行動療法など様々な取り組みはあるのですが、それによって症状がなくなるかという、決してそうではない。最初にお話したように、成長と共に状態は変わってきます。ただ、もともと持っているむずかしさというのは何らかの形で残っていきますので、そこうまく付きあうことを学ぶことが重要ではないかと考えています。

自分のことを分かって、困難なところはどうすれば上手いのか、補えるのかを学んでいくプロセスが重要です。そのために私は「自律」という言い方をしましたが、その部分を自分でできるようになるか、こちらがサポートしていく中で学んでいけたらいいのではないかと感じています。

—教育機関の現状と、先生が考える発達障害児のための理想の教育についてお伺いします。

非常にむずかしい問題ですね。というのは世界的には「インクルーシブ教育」という流れがあり、すべての子どもが同じようなかたちで教育を受けるのは当たり前だという考えになっています。

日本もその方向にシフトしつつあるのですが、ただ機械的に同じ教育を受けることが、本当に子ども達にとって幸せなのか考えると、やはり子どもそれぞれにふさわしい教育を受けさせることが大切だと思います。通常学級のなかに障害のある子ども達が入って、それですべてOKかという、ちょっと違うように思います。そういう場では学びきれない部分が絶対あるんですよ。私は学校とは違う、家庭とも違う、その中間ぐらいの場所をつくりたいと考えています。制約はそれなりにある、でも基本的に好きなことはできる。その中では他人とぶつかることも出てくるけれど、いかに折り合いをつけていくか。それを楽しく学んでもらおうと思っています。

—例えばどのような学び方がありますか。

先ほど話した鉄道が好きな子ども達ですと、集まってみんなで出かける計画を立てるのですが、そのときにコンペを行っています。プランを立てさせて、それを発表して、一番票が集まったところに行こうと。最初のうちは自分の好きな車両があるところに行きたい、写真を撮ればいいので他のことはどうでもいい、ごはんとコンビニのおにぎりでいいなどとプレゼンしていました。

そして票がもらえない子ども達は、どうして票が集まらなかったか話し合うようになります。「実はこの近くにこういう場所があって、そこは〇〇という映画のロケをしたところだ」、「その近くにはこういうお店があってこんなものが食べられます」みたいな提案をする。そうやって自分の好きなことだけでなく、みんなの関心を引きつけて票を集めるにはどうしたらいいかを考えるようになるんですね。なおかつ自分が行きたいところだけをみんなが主張していると、どこにも行けなくなってしまいうので、折り合いをつけるようになります。どこにも行けなくなるのが一番困るわけですからね。だから今回は仕方がない、あいつが言うところに行こう、というふうに折れることを学んでいくわけです。

【 みんなが楽しく生きる 】

—日本全体の発達障害への取り組みについて伺いたいと思います。

岩手県一関に「ええ町づくり隊」というNPO法人があります。そこで最初に行った活動は、自閉症の子ども達が町に出て、お店で買い物をしたり床屋さんに行くということ、普通にできるようにしたいということでした。最初は商店街の人たちに自閉症とはどういうものなのかを詳しく説明したそうです。でもなかなかうまくいかない。それで方向性を変え「〇〇くんをわかってほしい」「〇〇ちゃんを知ってほしい」というふうにしたそうです。具体的に言うと、自閉症の子の馴染みの店の方に「〇〇くんはこういうふうになると話してくれたり、分かってくれたりするんだよね」と一人ひとりについて紹介してもらったそうです。

「自閉症」という人はいません。「〇〇くん」「〇〇ちゃん」という人がいて、その人が自閉症という症状をもっている。結局、自閉症ということを通して理解できても、それが人間関係に結びつかないと意味がない。やはり一人ひとりのことを知って、初めて付き合いができてくるのではないかと。

そういうことを積み重ねて、その子が行ける場所がどんどん増えていく。そのお店の人を通して近所の人とのつながりもできて、行ける場所がますます増えていく。そういう活動は素晴らしいなとは私は思っています。たぶん昔の日本であれば近所の〇〇くん、〇〇ちゃんをみんな知っていたのですが、いまはそういう社会ではないですよね。とくに発達障害の子ども達に関しては、町の中でその子を知っている人を少しずつ増やしていくことが、将来的にはその子自身の力になっていくと思います。

—発達障害児の親御さんや周辺関係者に知ってほしいことはどのようなことですか。

発達障害児をお持ちのご家庭のまわりの人たちに分かってほしいことは、実は親御さん自身も悩んでいたり苦しんでることが多々あるということです。でも、それをなかなか理解してもらえず、「なんだ、あの子は」とか「あの子とは遊ぶな」、「あの子のせいで授業が遅れる」など心ない声も聞こえてしまいます。そういうことを聞かずに親御さんはつらい思いをしています。だから少しでもいいのでそういった親御さんの味方になっていただきたい。そうすることでお互いにいろんなことがわかって

いけると思います。

ご自身のお子さんに障害がある場合には非常に複雑です。最初に「あれ?」と感じてから、症状を理解し納得するまで、ものすごい葛藤があります。そういうときに親御さん同士のつながりができていると非常に心の支えになります。すでに大きくなったお子さんをお持ちのお母さんから話を聞いたり、自分の子どもが小さいときはこうだったか、こうしたらうまくいったよと話を聞けると少しは安心できるかなと思います。そういう組織もありますので、もし心配でしたら専門機関で紹介してもらいたいと思います。

—最後に、障害をもっている人たちのよりよい生き方についてお聞きしたいと思います。

簡単に言うと「楽しく生きる」ということだと思います。もちろん私達ではわからない大変さというのはたくさんあると思いますが、サッカーチームのメンバーをみると、楽しそうだと思いますね。いろんな話をしたり、励ましあったりしながら、楽しく生きられるのが一番かなと思います。

かなり年配の障害者の方なんですけど「こんな楽しい人生、なくしてしまうのっていいない」と言っていました。年齢を重ねても、そういうような人生を送れるのはいいですよね。その楽しみの中にはつらいこともあるでしょうが、つらいことも自分のためになっているんだと、前向きな気持ちになる、そんな生き方ができるといいと思います。